

## グレード別にみた凍結融解胚移植による出生児データ比較

宮崎 友佳<sup>1</sup>、水野 里志<sup>1</sup>、井田 守<sup>1</sup>、福田 愛作<sup>1</sup>、森本 義晴<sup>2</sup>

<sup>1</sup>IVF 大阪クリニック <sup>2</sup>HORAC グランフロント大阪クリニック

### 目的

近年、生殖補助医療（ART）の進歩や様々な社会背景により、ART により出生した児の数は年々増加している。しかし、方法別検討や胚グレード別調査の殆どは新鮮胚移植によるもので、融解胚移植の児における報告は少ない。そこで、凍結融解単一胚盤胞移植により出生した児のデータを移植した胚盤胞グレード別に比較したので報告する。

### 対象と方法

2009 年から 2015 年の間に凍結融解単一胚盤胞移植を実施し出産に至った 913 児を対象とした。BL1, BL2 は今回の検討の対象外とした。まず、移植された胚盤胞の ICM と TE のグレードにより児を 3 群に分けた。ICM のグレード：A (Ia 群, n=311)、B (Ib 群, n=599)、C (Ic 群, n=3)、TE のグレード：A (Ta 群, n=145)、B (Tb 群, n=607)、C 群 (Tc 群, n=161)。ICM と TE でそれぞれ在胎週数、出生時身長、出生時体重、性比、先天性異常発生率を T 検定及びボンフェローニ法を用いて比較した。なお、胚盤胞のグレーディングにはガードナー分類を用いた。

### 結果

在胎週数、出生時身長、出生時体重および先天異常発生率は、ICM、TE ともに 3 群間に有意な差はなかった。ICM における各群の性比は、Ia:1.05, Ib:1.2, Ic:0.50 で、3 群間で有意な差は見られなかった。しかし、TE では Ta:1.5, Tb:1.1, Tc:0.9 で、Ta 群で Tc 群と比べて男児の割合が有意に高かった (p=0.035)。

### 考察

在胎週数、身長、体重および先天異常発生率については、ICM、TE ともにグレードの違いによる有意な差は見られなかった。以上より、着床し出生に至れば移植時の胚盤胞グレードの差異は、出生時児の身体発育や先天異常に影響しないことが示唆された。性比は、Ta-Tc 群間で男児が有意に多くなった。発育の早い胚で男児の割合が高くなることが報告されているが、性比の決定には胚発育の早さの指標の中でも特に TE の細胞の数や密度が重要な要素であることが示唆された。